

# 事業計画の概要

## 建学の地「京都」で、さらなる発展を目指す

- 京都学園大学 「京都太秦キャンパス」 山ノ内浄水場跡地活用事業

学校法人 京都学園

2012.08.02

# 事業方針

学校法人京都学園(以下「本学園」という)の創立者、辻本光楠は、1908(明治41)年に発性学院を創設、1925年(大正14)年京都商業学校を開設、現在は京都学園高等学校、京都学園中学校として京都市内の中等教育を支えています。

1969(昭和44)年には亀岡市で京都学園大学(以下「本学」という)を開設し、その後、本学は長く亀岡市で教育事業を展開してきました。亀岡市の豊かな自然に恵まれ、落ち着いた環境の中で、京都商業学校の設立目的である「商業教育機関の充実」、言い換えれば、「ビジネスを支える人材の育成」の基本精神の下、実学を重視した教育を実践し、行政や地元企業との連携、高大連携を通じ、「地域に生き、活かされる大学」を展開してきました。

この度、京都市の山ノ内浄水場跡地活用事業者として選定されたことから、京都市内で事業展開をする機会を得、地下鉄等の公共交通の結節点であるサンサ右京の至近に位置する山ノ内浄水場跡地に新たにキャンパスを設置することとし、教育事業を展開します。本学園の建学の精神に基づく教育目的を継承、実践する場を、本学園の発祥の地である京都市内に設置することで、京都太秦、京都亀岡の2つのキャンパスそれぞれの特色を活かした教学を展開し、さらなる教育研究内容の充実を図る中で、大学の社会的使命を果たしていくことを事業の方針とします。



京都商業学校 < 1925(大正14)年開設当時 >



京都商業学校 < 1928(昭和3)年 花園へ移転 >



京都学園大学 < 1969(昭和44)年開設当時 >

# 教育目的を継承し、さらなる発展を目指す

## 大学の教育目的

### 「世界的視野で主体的に考え行動する人材」の育成

本学園は、「日本人らしい日本人の育成」を建学の精神として掲げてきました。この建学の精神は、グローバル化が進展する今日的な時代状況においては、日本文化の伝統を重んじ互恵平等の精神に基づいて国際社会の中で活躍する人材の育成を意味しています。本学は、このような建学の精神を踏まえ、「世界的視野で主体的に考え行動する人材の育成」を教育目的としています。

## 事業の目的

### 「京都、亀岡 2つのキャンパスでさらなる発展を目指す」

本学の教育目的に基づいた教育事業を行うため、「京都太秦キャンパス」に新たに2学部(現代ビジネス学部及び人文学部<2学部ともに開設構想中>)を設置します。

両学部では、京都の地域社会を生きた教材とし、世界的視野に立って知的探求を行い、社会が求める人材の育成に取り組む学部としての発展を目指します。また、「京都亀岡キャンパス」及び地域との連携を行う中で、教育研究の充実を図り、両キャンパスをともに発展させていくことを事業の目的とします。

# ダブルキャンパスによる相乗効果

## 新たな教育システムを全ての学生に

「京都太秦キャンパス」と「京都亀岡キャンパス」のダブルキャンパス制とすることで、40余年にわたり亀岡の地で培ってきた教育実績と教育資源を活かすと同時に、両キャンパスそれぞれの地域特性に合致するよう教育の組織を再編します。そのことにより、さらなる教育研究内容の充実を図り、京都市が誇る伝統文化や産業・商業活動と、亀岡市の豊かな自然環境それぞれの地域的特徴を強く連携して構築する新たな教育システムを、両キャンパスで学ぶ全ての学生が利用できます。

また、「京都太秦キャンパス」と「京都亀岡キャンパス」は地理的に近い位置にあり、各キャンパスでの研究成果を相互に発信し合うことで、教育研究の高度化を図るとともに、これまで以上に行政や企業との連携を深め、ダブルキャンパス制の利点を最大限に活かします。



# 「京都太秦キャンパス」の教学体制

第1期 < 2015(平成27)年度 ~ 2018(平成30)年度 >

## コンセプト

---

「都市・ビジネス・文化」を中心とした教育の実践

## 学部: 2学部5学科

---

現代ビジネス学部 < 2015年(平成27)年度 開設構想中 >

経済学科

経営学科

法学科

人文学部 < 2015年(平成27)年度 開設構想中 >

社会学科

日本文化学科

学生・教職員数 < 2018(平成30)年度 >

---

約2,000名

# 「京都太秦キャンパス」の教学体制

第2期 <2019(平成31)年度～2022(平成34)年度>

現代ビジネス学部と人文学部をさらに充実し、上位機関として大学院の設置を含めた構想を進めていきます。また、今後、ますます必要となる国際的競争力のある人材、都市に特有な問題の解決にあたる人材を育成するための新たな学部・学科を構想し、さらなる教育・研究体制の高度化を図ります。

**学生・教職員数 <2022(平成34)年度>**

**約3,000名**

# 「京都亀岡キャンパス」の教学体制

## コンセプト

---

「生命(いのち)・健康・食農」を中心とした教育の実践

## 学部: 3学部5学科

---

人文学部 < 2015年(平成27)年度 開設構想中 >

心理学科

バイオ環境学部

バイオサイエンス学科

バイオ環境デザイン学科

食農環境学科 < 2015年(平成27)年度 開設構想中 >

スポーツ健康学部 < 2015年(平成27)年度 開設構想中 >

スポーツ健康学科

# 京都学園大学が育成する人材

## 幅広い職業人の養成を目指す

### 実務実践力を持った人材の育成

「人間力」= 社会に必要とされる「6つの基礎力」(協働力・適応力・コミュニケーション力・行動力・課題発見力・論理的思考力)を身につけた人材を育成する

### ビジネスを支える人材の育成

インターンシップやボランティア活動等を通じて、社会のあり方や仕組みを学び、その持続的発展に貢献できる人材を育成する

### 21世紀型市民の育成

フィールドワーク等の実践と座学の連携強化を図り、「時代の変化に併せて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材」を育成する

### アジアを舞台に活躍する人材の育成

本学の教育目的「世界的視野で主体的に考え行動する人材の育成」に基づく国際化教育を実施するとともに、留学生の受入れを拡大し、国際感覚豊かな人材を育成する

# 地域・社会への貢献

## 地域との連携

本学は、これまで、「京都亀岡キャンパス」において、地元行政や各種教育機関との間で積み重ねてきた連携実績を活かし、京都市並びに周辺地域を新たな連携の場として連携を進め、新しい活動を展開します。

「右京区大学地域連携に関する協定」にも参画し、「大学のまち京都」のなかで、地域と大学の組織的な連携強化「COC (Center of Community)」構想を推進するなど、周辺地域を巻き込んだ「知の拠点」を目指します。

## 都市防災施設としての機能

「京都太秦キャンパス」は、伽藍配置の校舎が防火壁として機能し、大規模な市街地火災等の都市災害から、センタープラザに集まった市民の方々を守る設計です。その他の災害の際にも、人道的措置として提供・貸与する防災備蓄品を保管する倉庫を備え、都市防災施設としての機能を果たす計画です。また、キャンパス内で防災に関する催しを定期的を開催するなど、地域の方々に「防災」を意識する機会も提供します。

## にぎわいゾーンの形成

キャンパスの御池通と葛野大路通沿いは「にぎわいゾーン」と位置づけ、施設を道路から十分に後退させて配置することにより、歩道と一体となった安全快適で開かれた空間を確保します。さらにこの空間に面し、地域交流センター(仮称)やブックセンター(仮称)等の施設配置を構想し、学生や教職員に加え、地域住民や近隣事業所の人々にも開かれた、にぎわいのある環境を創出します。また、公開講座、産公学や地域との連携など、「広域から人を集める」仕組みづくりも行い、一層のにぎわい創出を目指します。

# 「京都太秦キャンパス」施設構想

# 施設整備の方針

「人と人、人と緑のコミュニティキャンパス」をコンセプトに、学生と社会・周辺地域を結ぶ交流ゾーンを設け、学生の活気や豊かな創造力を生む開放型キャンパスを目指します。また、都会の中にありながら、自然と緑が豊富な広々とした空間の中に、学生の快適な学びの場を創出するとともに、地域にも広く開かれたキャンパスとするよう、次の5つを施設整備の方針とします。

## 5つの具体的方針

開かれたキャンパスと充実した交流空間により、学生の活気や想像力を創出

エコ・バイオ技術を活かした緑豊かな環境を整備し、学生の快適な学びの場を創出

平安時代の街区と水文化を継承するキャンパスプラン

質の高い新しいデザインにより、都市景観を向上させる周辺と調和した親しみやすい街並みを創出

安全かつ機能的な人と建物・人と車のより良い関係の実現

# 施設構想概要

## < 建物配置 >

土地の歴史を継承し、既存ろ過操作廊の軸線を中心に「センタープラザ」を配置し、さらに「センタープラザ」を中心に分棟した建物を伽藍状に配置します。

御池通と葛野大路通沿いは、キャンパスの顔となる本館建物や市民の方々も利用できる施設が入る建物の配置を検討します。

大学を運営しながら安全に増築工事が進められるよう、将来を見据えた建物の配置を検討します。

## < ゾーニング >

アクセスの主動線になる御池通沿いに、大学の主たる機能を集約した「本館」と「オープンプラザ」や「シンボルパーク」等からなる「交流ゾーン」の配置を検討します。

学生の憩いの空間であり、地域住民も利用可能な「センタープラザ」を囲む落ち着いた「キャンパスゾーン」に、講義機能や厚生機能を備えた施設の配置を検討します。

緑が豊かで、学生の快適な学びの場、そして市民が憩える潤いのある空間を創出するため、西高瀬川が流れていた部分に「ピオトープ」を配置します。

# 施設構想イメージ

キャンパス完成時の施設イメージ



# 施設構想イメージ

御池通と葛野大路通交差点付近からのパース



御池通と葛野大路通の都市景観を形成するように、「交流ゾーン」「キャンパスゾーン」「ビオトープ」にゾーニングして施設を配置します。建物は分棟としてキャンパス内を通り抜ける動線を確保し、中央の広場は学生の憩いの空間とするとともに、地域住民も利用可能なセンタープラザとして整備します。また、各所に広場を設置し、地域に開かれた環境を整備します。

施設整備のコンセプトである「人と人、人と緑のコミュニティキャンパス」にふさわしく、色彩は緑の映える穏やかな色合いとするなど、京都のやまなみを背景とした周辺地域との調和を図るとともに、風格のある施設の整備によって、地域の新しい景観の創出に貢献します。

# 施設構想イメージ

御池通沿いからのパース



構想イメージ

# 施設構想イメージ

